

# 皿池遺跡第4次発掘調査報告



2002年6月

財団法人東大阪市文化財協会

**表紙写真**

第Ⅲ層上面(第Ⅱ層上面)検出遺構中央部(西から)

手前右の大きな穴は土壙3。その奥の土師器壺は図3.12-3(ピット10)。

さらに左奥の土師器壺は図3.12-5。その左の土師器高坏は図3.12-4。

高坏の上に白く写るものはピット11の石。

例言

1. 本書は共同住宅浄化槽埋設に伴う皿池遺跡第4次発掘調査の報告書である。

2. 本調査は南郷正夫氏の委託を受けて財団法人東大阪市文化財協会が実施した。発掘調査に伴う工事は南郷正夫氏から発注され生和建設株式会社が行った。

3. 現地調査と整理は金村浩一を担当者とし、事務局体制等は次の通りである(2002年3月現在)。

理事長　日吉亘

常務理事　北山良(東大阪市教育委員会社会教育部参事)

事務局長　小島進

調査部長　同上(兼務)

庶務部長　同上(兼務)

庶務主任　上野節子

庶務部員　朝田直美　大林亨

調査補助　小西徹治　橋川敬子　重定礼子　武田慎平

4. 調査における土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」に準じた。

5. 造構実測は建設省告示による国土座標第VI系を使用し、水準高はT.P.値を用いた。

6. 本書に掲載した皿池1号墳出土土器は水嶋(旧姓田中)万紀子が実測と清書を行った。

7. 本書の編集と執筆は金村が行った。

8. 本調査の経費はすべて南郷正夫氏のご負担によるものである。調査に御理解と御協力をいただき深く謝意を表したい。

9. 現地調査は生和建設株式会社、株式会社鳥田組他の諸氏による協力によって円滑に進行した。記して謝意を表したい。

目次

# 第1章 はじめに

皿池遺跡は大阪府東大阪市喜里川町・河内町・本町にひろがる弥生時代から現代に至る複合遺跡である。遺跡は生駒山西麓の沖積扇状地の斜面(現地表面約T.P.+15 ~ 30m)に位置する(図1.1)。

皿池遺跡の南には飛鳥時代に創建された河内寺跡が接し、北には弥生~古墳時代の集落と推定される孤塚遺跡が接している。東方には中世に現在の東大阪市水走一帯を開発した水走氏の城敷が存在したと考えられている水走氏館跡や出雲井古墳群や山畠古墳群など横穴式石室を主体部とする小型古墳によって構成される群集墳等が位置している(図1.2)。

皿池遺跡は現在、繩手北中学校となっている溜池(五条皿池)の底から弥生時代後期の土器が採集され存在が知られるようになった(注1)。その後、繩手北中学校建設に伴う2度の試掘調査(皿池遺跡第1次・第2次発掘調査)や繩手東小学校建設に伴う試掘調査と発掘調査(皿池遺跡第3次発掘調査)が行われ、弥生時代後期の竪穴住居や古代の掘立柱建物、土器棺墓等が見られ、和銅闇塚等が出土している(図1.3)。遺跡のほとんどは低層住宅となっており大規模な工事が無いため本格的な発掘調査は上記の他には実施されていなかった(表1.1)。一方、東大阪市教育委員会文化財課による試掘・立会調査は機会があるごとに行われ、しばしば貴重な資料を得ている。特に、1996(平成8)年8月の個人住宅建設に伴う調査では古墳の周溝を発見している。この古墳は皿池1号墳と呼ばれ、周溝からは軟質焼成の韓式系土器喪片(図1.4-1)、ほぼ完形に復元された船形埴輪、家形埴輪片、胡顔形埴輪片等が出土している。また、古墳に伴うと考えられる土師器高壙(図1.4-2 ~ 4)や土師器壺(図1.4-5)等も出土している(注7)。

今回、南郷正夫氏によって東大阪市本町459-1・2において共同住宅の建設が計画された。計画地が皿池遺跡の範囲内に位置するため1994(平成6)年4月4日に東大阪市教育委員会文化財課によって試掘調査が実施された。その結果、発掘調査の必要が指示され、関係機関の協議の結果、共同住宅本体は掘削が浅いため工事立会を行い、浄化槽設置箇所は財団法人東大阪市文化財協会が発掘調査を実施することとなった。

調査は試掘結果にもとづき、現地表面下約1.7mまでの盛土・現代耕土層を機械によって掘削し、以下を人力によって掘削しつつ、遺構や遺物の検出作業等を行う計画であった。調査は鋼矢板打設等の土留め工事を施さず、調査区の周囲を約1m掘り下げて行った。調査面積は約46 m<sup>2</sup>である(図1.5)。その結果、弥生時代後期の落ち込み、古墳時代の土礫やピット、古代のピット、中世の土礫や溝等を検出し、整理箱(外寸386mm × 59mm × 155mm)に8箱の上器類(復元した状態を含む)と若干の杭やサメカイト片等を得た。出土遺物には遺跡の略称、次数、登録番号を記している(例:SRI4R001)。

今回の調査によって皿池遺跡の様相を知る貴重な資料を得ることができた。特に遺跡範囲の南端に位置する地点で遺構や遺物を検出した意義は大きい。次章以下に調査の結果を略述する。なお、調査期間は1994(平成6)年7月20日 ~ 8月12日である。

次数	事業名	調査期	期間	面積	調査主任	参考	文献
第1次	学校建設に伴う遺跡の調査	不明	1972.6.11 ~	不明	東大阪市教育委員会		
第2次	(仮称)允舎中学校建設に伴う遺構の削除	河内町333	1973.12.8 ~ 12.20	12	東大阪市道路保溝調査会		注2
第3次	市立繩手北小学校分校(仮称)工事に伴う調査	河内町349・350	1976.2.16 ~ 2.28	72	東大阪市道路保溝調査会	第1次試掘調査	注3・4
	市立繩手北小学校分校(仮称)工事に伴う調査	河内町350・351	1976.6.1 ~ 6.30	135	東大阪市道路保溝調査会	第2次試掘調査	注3・5
	市立繩手北小学校分校(仮称)工事に伴う調査	河内町349・350	1976.9.24 ~ 11.17	1000	東大阪市道路保溝調査会		注3・6
第4次	戸別住宅地盤改良工事に伴う調査	木町459-1・2	1994.7.20 ~ 8.17	46	財團法人東大阪市文化財協会	今回調査	

表1.1 皿池遺跡発掘調査一覧(面積はm<sup>2</sup>)

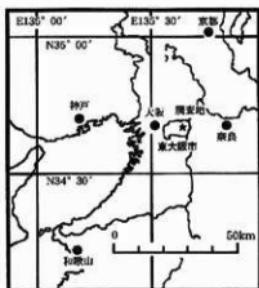


図1.1 東大阪市及び調査地位置図(S=1 : 200,000)



図1.2 調査地及び周辺遺跡位置図(S=1 : 25,000)

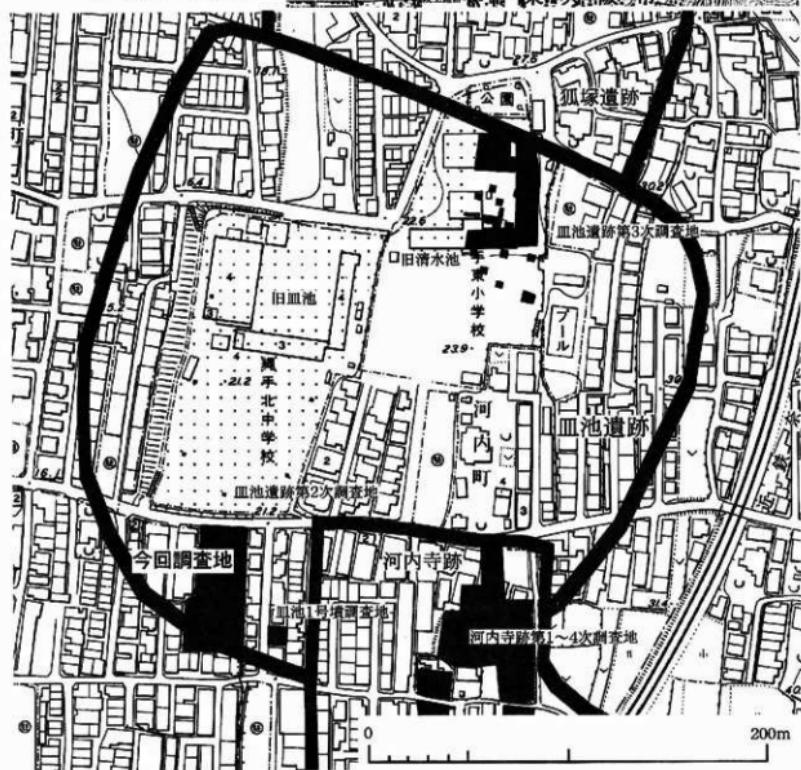
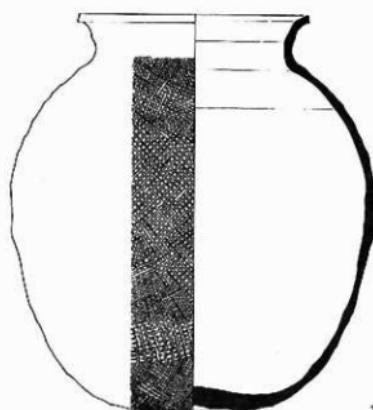


図1.3 調査地及び周辺主要調査位置図(S=1 : 2,500)

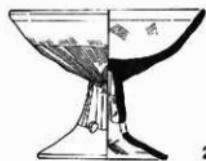


韓式系土器壺は軟質焼成で黒斑が1カ所あり、その反対側に煤のような痕がある。体部外面には格子状の叩きを施し、体部内面は叩きをなで消す。口縁部はなで。図は反転している。口径18.7cm、器高32.4cmを測る。

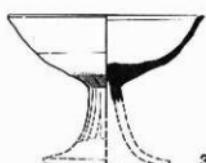
土師器高坏は脚部を坏部に挿入し接合している。坏部はなで、脚部外面にはへら磨きを施す。2は内外面に刷毛を施し、口径15.4cm、器高12.3cm、底径10.4cmを測る。

3は外面に刷毛を施し、口径15.8cmを測る。4は口径15.2cm、器高12.0cm、底径10.1cmを測る。

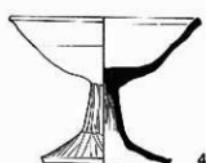
土師器壺の体部外面には刷毛を施し、内面には接合痕が残る。体部内面と口縁部はなで。口径19.4cm、器高45.0cmを測る。



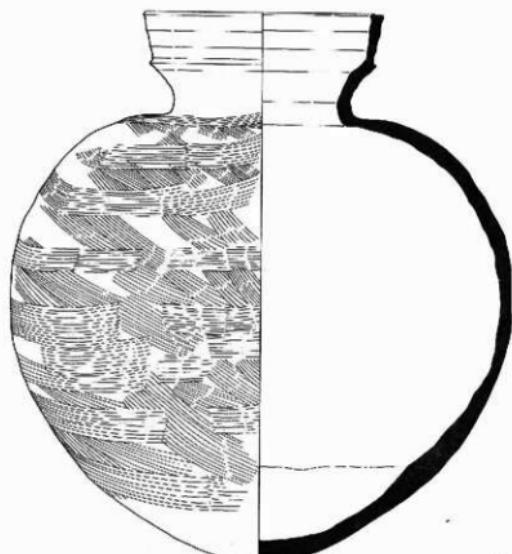
2



3



4



5

図1.4 皿池1号墳出土土器(S=1:4)

## 第2章 層序と遺物

調査区内の層序は上層から順に以下の通りであった。

表上・盛土・現代耕土層

これらは機械によって掘削した。盛土は数層に分層されるが、一度に盛られたものであろう。

現代耕土層 オリーブ灰色中粒砂混じり砂質シルト層  
中世遺物を包含し近世の耕土層と考えられる。

第I層 オリーブ灰色中粒砂混じり細砂～砂質シルト層

下面で溝や杭等の遺構を検出した。本層中からは瓦器皿片(図2.4-1)や瓦器範片(図2.4-2)、土師器笠片(図2.4-3)等が出土した。瓦器の内外面には密なへら磨きを施す。本層は中世の耕土層と考えられる。

第II層 黒色～黒褐色砂礫～中粒砂混じりシルト層

上面は中世～古墳時代の遺構面となる。挙大の礫を多く含み上面での遺構検出を諦め、遺構と一括して第III層上面まで掘削している。本層上面を精査中に須恵器坏片(図2.4-4)、土師器鉢片(図2.4-5)等が出土し、本層中からは土師器高坏片(図2.4-6)や弥生土器壺片(図2.4-7)等が出土した。土師器の外面にはへら磨きを、弥生土器の外面には刷毛を施す。本層は弥生時代後期に堆積したと考えられる。

第III層 暗灰黄色粗砂混じり細砂～粘質シルト層

本層上面で遺構を検出したが、これらの遺構は第II層上面あるいは層中から掘り込まれたものと考えられる。本層上部からは土師器壺片(図2.4-8)や弥生土器壺片(図2.4-9・10)弥生土器壺片(図2.4-11)等が出土した。土師器壺の内面にはへら削りが施され、上層から混入したものと思われる。図2.4-10の弥生土器壺の口縁部外面には3条の沈線が、内面には刷毛が施されている。弥生土器壺片の外側には叩き目が残る。本層下部からは弥生土器壺片(図2.4-12)、弥生土器壺片(図2.4-13～15)等が出土した。図2.4-12～14の内外面には刷毛を施す。図2.4-15の弥生土器壺の底面と体部内面にはへら磨きを施す。本層は弥生時代後期に堆積したと考えられる。

第IV層 オリーブ灰色中粒砂～シルト質細砂層



図1.5 調査区位置図(S=1:1000)



図2.1 調査区北壁土層(南東から)



図2.2 掘削底の状況(西から)

本層中で落ち込みを検出したが、本来は本層上面のものと考えられる。本層中からは、弥生土器壺片(図2.4-16・17)や弥生土器壺片(図2.4-18・22)、弥生土器高坏片(図2.4-19)、弥生土器底部片(図2.4-20・21)等が出土した。図2.4-16・17・19・21の外面にはへら磨き、内面には刷毛を施す。図2.4-18の弥生土器壺の口縁部外面には波状文と直線文、籠状文が施されている。図2.4-20の弥生土器底部は外側に刷毛を施し、底面に木の葉痕が残る。図2.4-22の弥生土器壺の体部外面には籠状文と直線文、へら磨きが施されている。本層は弥生時代中期に堆積したと考えられる。

#### 第V層 青灰色中粒砂混じり砂礫層

本層上面で上曠状やピット状の遺構を検出した。本層上面を精査中に弥生土器壺片(図2.4-23)、弥生土器壺片(図2.4-24)、弥生土器鉢片(図2.4-25)、縄文土器深鉢片(図2.4-26)等が出土した。弥生土器壺の口縁部外面には列点文を施し、体部外面には接合痕を残す。図2.4-24の弥生土器壺の体部外面には横方向のへら磨きを施す。図2.4-25の弥生土器鉢の口縁部外面には綾杉文を施し、体部外面には籠状文や直線文、太いへら磨きが施されている。本層中からは口縁外面に刻み目を施す弥生土器壺片(図2.4-27)や弥生土器底部片(図2.4-28)等が出土した。本層は弥生時代中期に堆積したと考えられる。

#### 第VI層 暗青灰色シルト混じり砂礫・オリーブ灰色細砂～シルト層

本層中から遺物は出土しなかった。弥生時代中期に堆積したものであろうか。

### 第3章 遺構と遺物

遺構は第I層下面と第III層上面、第IV層中、第V層上面で検出した。先に述べたように第III層上面で検出した遺構は本来、第II層上面あるいは層中から振り込まれたものと考えられる。

#### 第I層下面検出の遺構

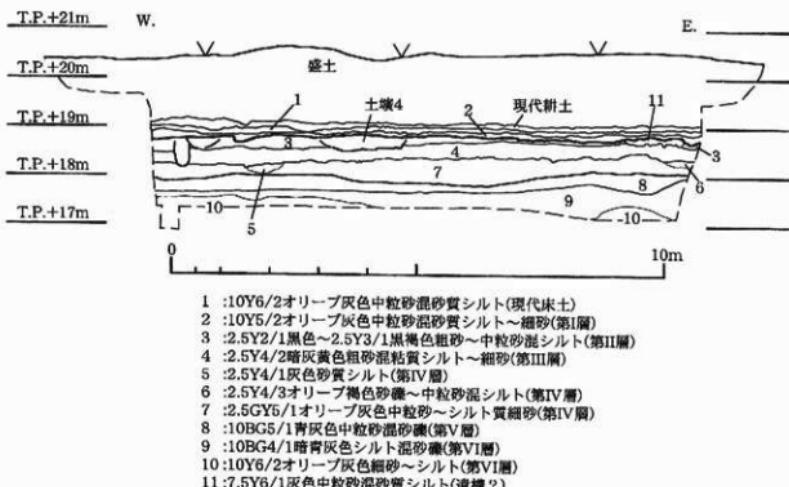


図2.3 調査区北壁土層図(S=1:100)

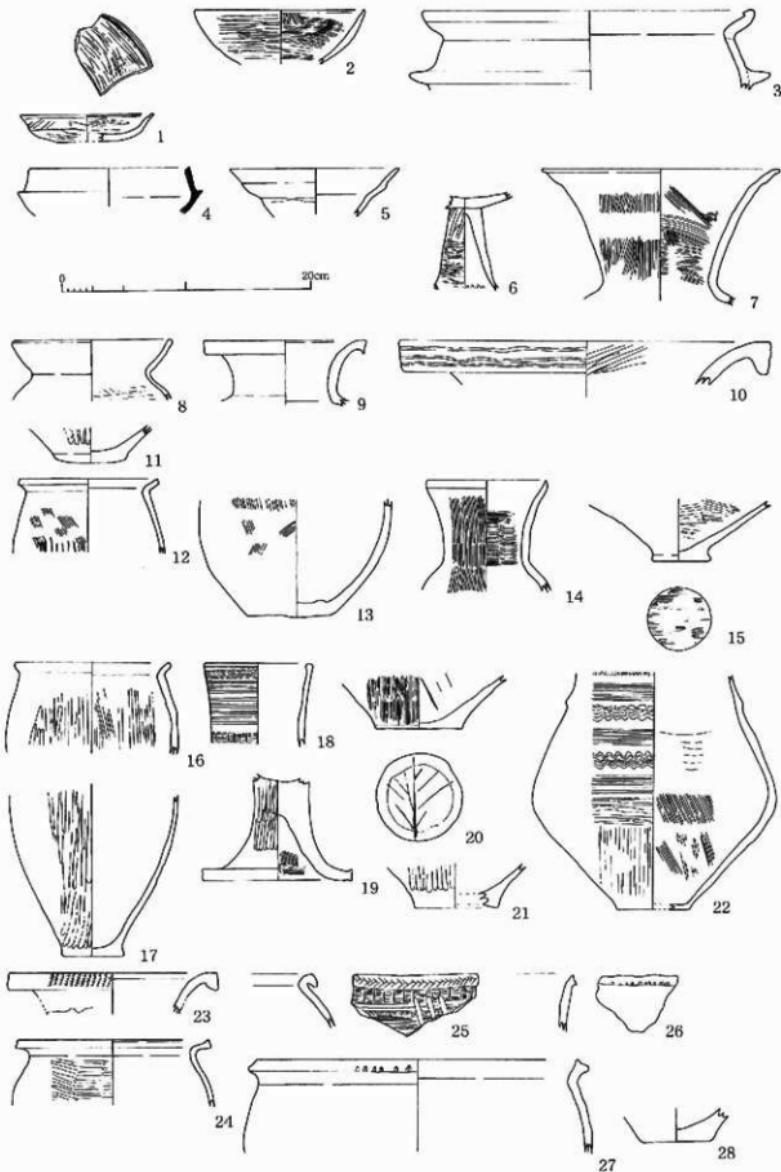


图 2.4 堆积层出土遗物(S=1:4)

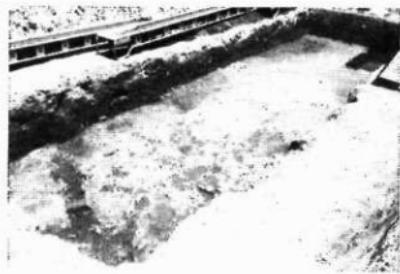


図3.1 第1層下面検出遺構全景(南西から)



図3.2 第1層下面検出の溝(南から)

溝やピット、杭を検出した。溝は座標北から東へ約33°振る方位をとり、幅約24cm、深さ約7~10cmを測る。ピットは深いもので深さ約6cmを測る。いずれも第1層によって埋没しており、中世に属するものと考えられる。これらは耕作に伴うものと思われるが詳細は不明である。

#### 第III層上面検出の遺構

調査区西半で土壌やピット等を検出した。東半の小ピット群は第1層下面で検出できなかったものと思われる。繰り返し記すが、これらは第II層上面あるいは層中から掘り込まれたものと考えられる。

土壌1は南北約80cm、東西約100cmの楕円形を呈すると思われ、深さ約22cmを測る。埋土から遺物は出土しなかった。

土壌2は南北約88cm、東西約118cmのやや不整形な隅丸方形を呈し、深さ約18cmを測る。埋土から少量の土師器や須恵器の細片が出土した。

土壌3は南北約110cm、東西約106~60cmのやや不整形な台形を呈し、深さ約19cmを測る。二つのピットを切る。埋土から少量の土師器や須恵器の細片が出土した。

土壌4は南北100cm以上、東西約100cmの隅丸

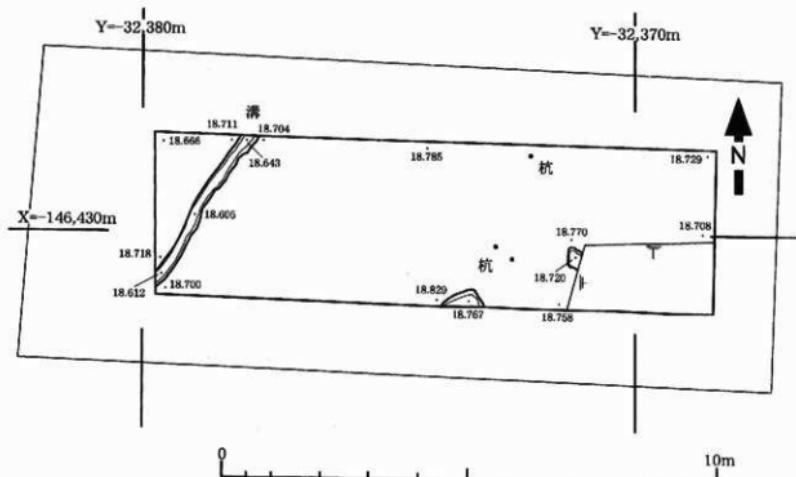




図3.4 第III層上面(第II層上面)検出造構全景

(裏から)

手前左の白線を引いていない方形の大きな穴は土層観察用のトレンチ。

右の小さなピット群は第1層下面で検出できなかったものと思われる。

図 3.6 第Ⅲ層上面(第Ⅱ層上面)検出構造部  
(北東から)

人物の前にある土師器甕は図3.12-5。人物の右の土師器甕は図3.12-3(ピット10)。その右の大きな穴は土壤3。その手前の土師器高杯は図3.12-4。

図 3.5 同左(西から)

手前中央が土壤1。その右は土壤2。その奥の大きな穴が土壤3。

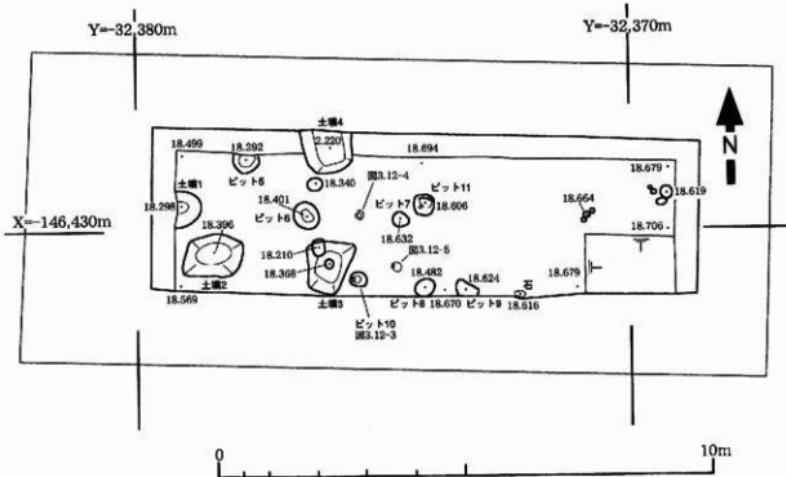


図3.7 第Ⅲ層上面(第Ⅱ層上面)検出構造平面図(S=1:100)

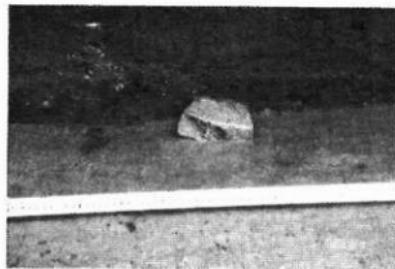


図3.8 第III層上面(第II層上面)検出の石  
(北から)

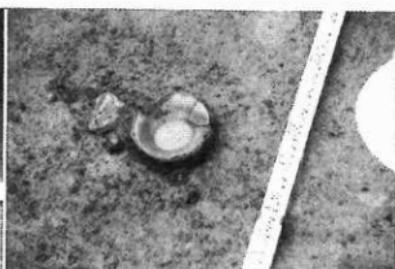


図3.9 同左検出の土師器高坏(図3.12-4)  
(南から)

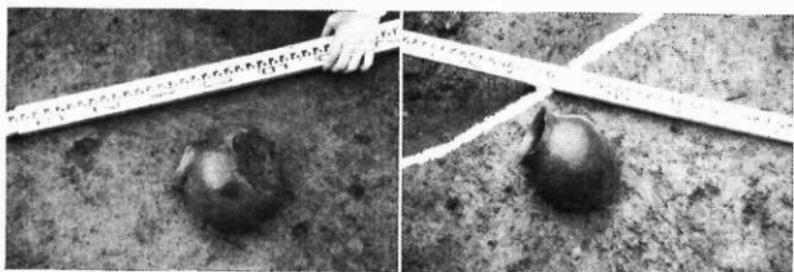


図3.10 同上検出の土師器甕(図3.12-5)  
(南から)



図3.11 ピット10の土師器甕(図3.12-3)  
(南から)

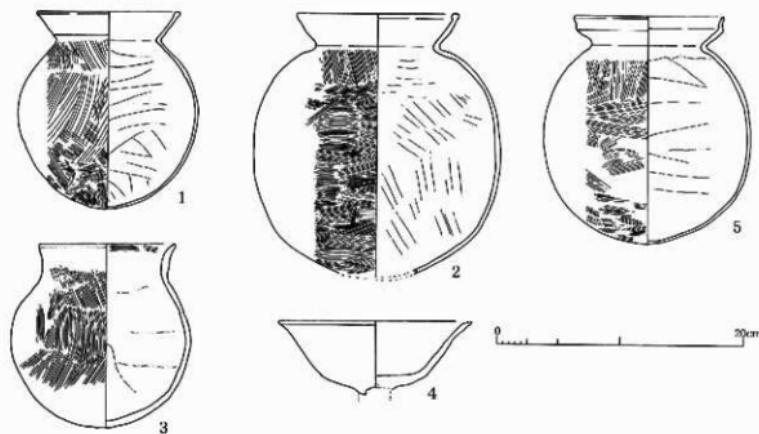


図3.12 第III層上面(第II層上面)検出遺構出土土器(S=1:4)

方形を呈すると思われ、深さ約10cmを測る。埋土から、ほぼ完形に復元できた2点の土師器甕(図3.12-1・2)等が出土した。ともに体部外面に刷毛、内面に削りを施す。

ピット5は径約50cmの円形を呈し、深さ約25cmを測る。埋土から少量の土師器や須恵器の細片が出土した。

ピット6は南北約50cm、東西約50cmの不整形な円形を呈し、深さ約22cmを測る。埋土から少量の瓦器碗細片等が出土した。

ピット7は長辺約28cm、短辺約20cmの方形を呈し、深さ約6cmを測る。埋土から少量の縁釉陶器細

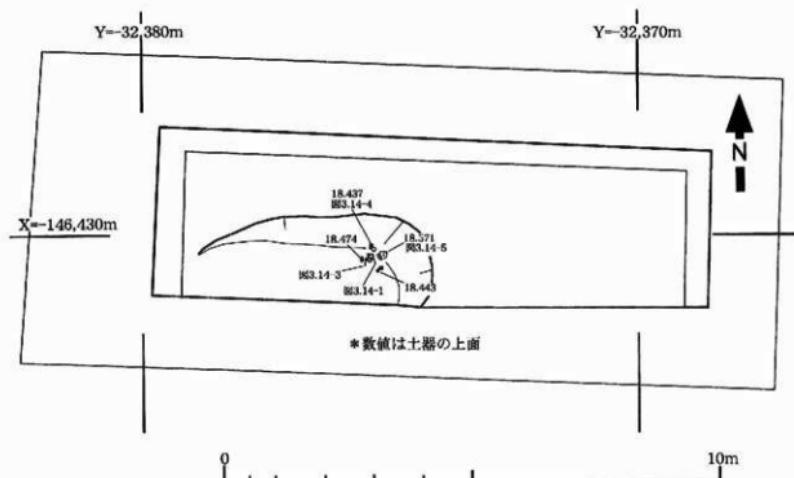


図3.13 第IV層中検出の落ち込み平面図(S=1:100)

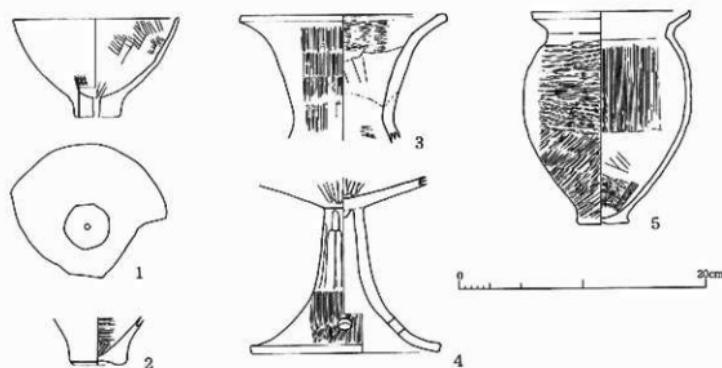


図3.14 第IV層中検出の落ち込み出土土器(S=1:4)

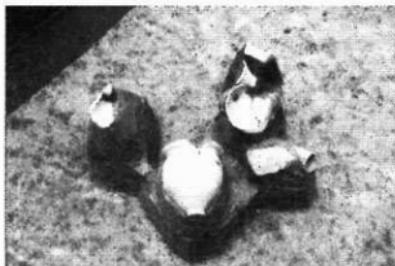


図3.15 第IV層中検出の落ち込み内土器出土状況  
(北東から)



図3.16 第V層上面検出遺構全景(東から)

片等が出土した。

ピット8は南北34cm、東西約40cmの楕円形を呈し、深さ約20cmを測る。埋土から少量の土師器細片が出土した。

ピット9は東西約44cm、南北34cm以上の台形状を呈し、深さ約5cmを測る。埋土から少量の土師器細片が出土した。

ピット10は東西約34cm、南北約28cmの隅丸長方形状を呈し、深さ約5cmを測る。埋土から完形の上師器壺が1点(図3.12-3)出土した。土師器壺は体部外面と口縁部内面に刷毛を施し、接合痕が明瞭に残る。

検出面上で出土した土師器高杯(図3.12-4)とほぼ完形の上師器壺(図3.12-5)はピット10と同様に、本末はピット中に存在していたものと考えられる。高杯は摩耗のため調整不明。土師器壺は体部外面に刷毛、内面に削りを施す。

ピット11は一辺約40cmの隅丸方形を呈し、深さ約14cmを測る。中には上面を捕えて石が据えられていた。これらの右は柱穴の根石と考えられる。埋土から遺物は出土しなかった。

上記以外のピットから遺物は出土しなかった。  
検出面上で出土した石は南北約14cm、東西約

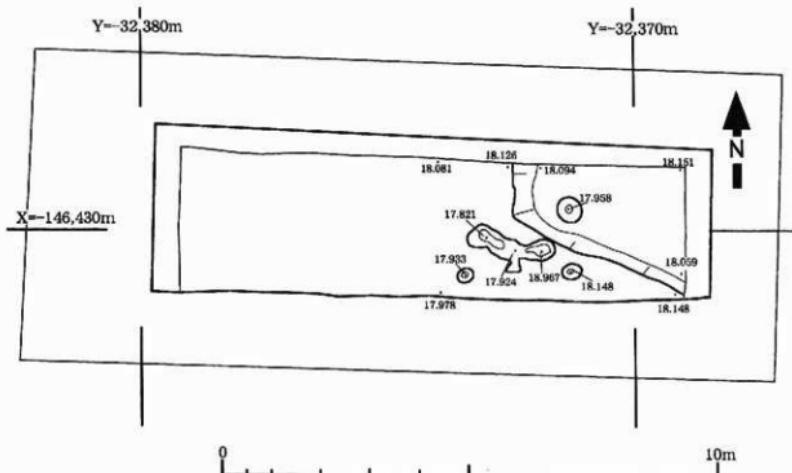


図3.17 第V層上面検出遺構平面図(S=1:100)

24cmを測る。上面が平らであり、柱を据えた礎石とも思われるが、詳細は不明である。

#### 第IV層中検出の遺構

南北2m以上、東西4.6m以上を測る落ち込みを検出した。調査区外にのび全体の形状等は不明である。第IV層中で検出したが、本来は第IV層上面のものと考えられる。第三III層の窪みとすべきとも思われる。肩部からは弥生時代後期の土器が集中して出土した(図1.4)。上器には約2/3が残る壺(図3.14-1)、底部片(図3.14-2)、壺の口縁部(図3.14-3)、高杯の脚部(図3.14-4)、ほぼ完形の壺(図3.14-5)等がある。壺は体部外面と内面に刷毛を施す。底部片の内面と壺の内外面も刷毛を施す。高杯は脚部外面に刷毛とへら磨きを施し、杯部内面にもヘラ磨きを施す。壺の外面には叩き、内面には刷毛が施されている。

#### 第V層上面検出の遺構

調査区の東部で不整形な溝状の上塙やビットを検出した。これらの埋土から遺物は出土せず、土質の変化した部分を遺構として掘削した可能性もある。

#### その他の遺物

機械掘削時に泥面子(図3.18)が出土した。泥面子は型作りの痕跡が残り、裏面に「門?巾? 七福会」の刻印がある。

## 第4章　まとめ

今回の調査で得られた知見を時代順に述べ、まとめとしたい。

第二II層は東から西へ流れる河川もしくは谷状地形(以下、仮に河川と呼ぶ)の埋土と考えられる。縄文時代晩期の土器が出土していることから、調査区は縄文時代には河川の一部であったと考えられる。各層からは弥生時代中期から後期にかけての上器が出土しており、河川は弥生時代中期には埋没はじめていたと考えられる。出土した弥生時代中期の土器はやや摩耗しており、調査区のやや遠方に当時の集落が存在したと思われる。弥生時代後期に河川は完全に埋没した。第IV層中の落ち込み等から出土した弥生時代後期の上器は摩耗が少なく、繩手東小学校から調査地周辺に存在した当時の集落で使用されていたものと考えられる。

第二II層上面では柱穴や上塙を検出し、調査区が古墳時代前期には集落となっていたことが明らかとなった。第二II層は主に疊によって構成されている。弥生時代後期に河川を完全に埋めた堆積作用が激しいものであったことを伺わせ、埋没した河川が逆に周辺よりもやや高くなったと想像される。その微高地を選んで集落が営まれたのであろう。検出された上塙等からは須恵器片が出土しており、集落は古墳時代後期にも連続していたと考えられる。調査地の東方約30mに位置する皿池1号墳もこの埋没した河川上の微高地に建造されていると思われる。また、第二II層上面で検出した遺構は調査区の西部に多く、東部にはほとんど検出されなかった。このことから、調査区中央付近が集落域と墓域の境であった可能性が高い。皿池1号墳の被葬者がこの集落の住人であったとすれば、彼(彼女)は自分の集落を見下ろす位置に葬られたことになる。

第二II層上面で検出したビットからは縄釉陶器の細片が出土しており、古墳時代前期に営まれた集落が平安時代に至るまで継続

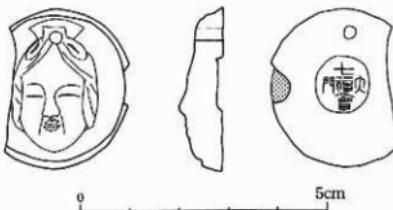


図3.18 機械掘削時出土の泥面子(S=1:1)

していた可能性が高い。集落の東方、古墳時代に古墳が築造されていた地域には7世紀に入ると寺院(河内寺)が築造される。

第II層上面で検出した遺構で最も新しいピット6からは瓦器碗細片が出土している。この瓦器碗は第I層から出土した瓦器碗や皿と同様に内外面に密なへらみがきが施され、12世紀初頃のものと思われる。この頃まで集落は古墳時代から継続し、おそらく13世紀初頃には廃絶したと思われる。河内寺跡から出土している軒瓦で最も新しいものが「鎌倉時代初頭」とされていることも傍証となろう(注8)。

集落の廃絶後、調査区は耕作地となったようである。調査区周辺は棚田あるいは段々畑に造成されたと思われる。その時期は13世紀中頃であろうか。

造成された田畠は江戸時代に改変の手が加えられたであろうが、調査区周辺が耕作地であった点に変化はなかったと思われる。20世紀後半に至って調査区周辺は市街地となる。機械掘削時に出土した泥面子は市街地化を示すものといえよう。

なお、今回の調査区は遺跡範囲の南端に位置する。遺構や遺物は遺跡範囲よりも広く埋もれていることが明らかとなった。行政上の皿池遺跡の範囲が速やかに広げられることを望みたい。

## 注

1: 藤井直正・都出比呂志・河内歴史研究グループ(1966)『原始・古代の枚岡』P.58 ~ 59

2: 萩本隆裕(1976)『皿池の調査報告<東大阪の歴史1>』東大阪市遺跡保護調査会

3: 萩本隆裕(1979)『皿池遺跡』『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査報20 瓜生堂上層遺跡・皿池遺跡発掘調査報告』東大阪市遺跡保護調査会

4: 萩本隆裕(1976)『繩手北(仮称)小学校新設工事に伴う皿池遺跡の調査』『調査会ニュース』NO.4 東大阪市遺跡保護調査会

5: 萩本隆裕(1976)『繩手北(仮称)小学校新設工事に伴う皿池遺跡の試掘調査-その2-』『調査会ニュース』NO.5 東大阪市遺跡保護調査会

6: 萩本隆裕(1976)『繩手北小学校分校新設工事に伴う皿池遺跡の発掘調査』『調査会ニュース』NO.6 東大阪市遺跡保護調査会

7: 皿池1号墳の正式な報告書は刊行されていないが、

東大阪市立郷土博物館(1999)『1999年度特別展示渡来人とのであい』

には皿池1号墳の周溝の写真、船形埴輪の写真、本書に実測図を掲載した土器の写真等が掲載され、

上野利明(1997)『東大阪市河内町所在皿池古墳山上の舟形埴輪について』『宗教と考古学』金闇惣先生の古稀をお祝いする会 慶誠社 P.199 ~ 210

には調査の概要と埴輪類の実測図等が掲載されている。

なお、出土遺物には調査名「河内寺8-342」と注記されている。

8: 東大阪市教育委員会(1974)『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報13 東大阪市河内町所在河内寺跡II』

なお、他の河内寺主要御藏の発掘調査報告書は以下のものがある。

谷本武・藤井直正・藤澤一夫(1968)『河内寺跡調査概報』大阪府教育委員会

東大阪市教育委員会(1973)『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報11 東大阪市河内町所在河内寺跡I』

原田修(1986)『河内寺跡の調査』『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.2, NO.1 財團法人東大阪市文化財協会

## 報告書抄録

ふりがな さらいけいせきだい4じはくつちょうさほうこく  
書名 皿池遺跡第4次発掘調査報告  
副書名  
巻次  
シリーズ名  
シリーズ番号  
編著者名 金村浩一  
編集機関 財団法人東大阪市文化財協会  
発行機関 財団法人東大阪市文化財協会  
作成法人ID 42710  
郵便番号 577-0843  
電話番号 06-6736-0346  
住所 大阪府東大阪市荒川3丁目28-21  
発行年月日 2002.06.30  
ふりがな さらいけいせき  
遺跡名 皿池遺跡  
ふりがな おおさかふひがしおおさかしほんまち459-1・2  
遺跡所在地 大阪府東大阪市本町459-1・2  
コード 市町村 27227 遺跡番号 不明  
北緯 34° 40' 38" (旧測地系)  
東経 135° 38' 43" (旧測地系)  
調査期間 1994.07.20 ~ 08.12  
調査面積 約46m<sup>2</sup>  
調査原因 共同住宅浄化槽埋設  
種別 集落  
主な時代 弥生/古墳/中世  
遺跡概要 弥生-落ち込み+河川-弥生土器/古墳-土壙+ピット・土師器+須恵器/中世-溝-土  
器器+瓦器  
特記事項 特記なし

---

### 皿池遺跡第4次発掘調査報告

2002年6月30日

発行 財団法人東大阪市文化財協会

〒577-0843 大阪府東大阪市荒川3丁目28-21 TEL.06-6736-0346

印刷 株式会社ダイニチ

〒553-0003 大阪府大阪市福島区福島5丁目15番13号 TEL.06-6451-4133

紙質 表紙 ニューエイジ 86.5Kg 本文 ニューエイジ 86.5Kg

製本 無線とじ

The 4th Excavation Report of  
Saraike Site,  
Higashi-osaka City, Osaka Pref., Japan.

二〇〇二年六月

June 2002  
Higashi-osaka City Cultural Heritage Association

